

Y30b 学校教育における疑似科学教育の影響

武藤浩二、長島雅裕、安部俊二、上蘭恒太郎、小西祐馬、古谷吉男（長崎大学教育学部）

「小学生の4割が天動説を信じている」という調査が縣らによって発表(2004年秋季年会 Y01a)され、多くの日本天文学会員に衝撃を与えたことは記憶に新しい。一方、正しい知識の有無の問題に留まらず、明らかに疑似科学(ニセ科学)と分類される教材が学校教育に入り込んでいることがここ数年の間に知られるようになり、日本物理学会などではシンポジウムも開かれ、その対策を考えるようになってきている。

ところで、典型的な疑似科学としてしばしば批判されるものに『水からの伝言』(江本勝、波動教育社)がある。これは、水に「ありがとう」などの「良い言葉」をかけると「綺麗」な結晶が、「ばかやろう」などの「悪い言葉」をかけると「汚い」結晶ができたりそもそも結晶ができなくなる、という「実験」結果を示すものである。実際は科学的批判に耐えない荒唐無稽なものだが、これが学校現場(特に道徳)で「だから良い言葉を使いましょう」という結論に誘導するためにしばしば使われていることが全国的に報告されている。

我々は、このような疑似科学教育の実状を調べるために、2010年4月に長崎大学生にアンケート調査を行った(回答数409名、うち243名は教育学部の新入生)。その結果、約1割の新入生が、高校までの段階でなんらかの形で疑似科学教育に触れていることがわかった。主には小学校での道徳の授業であるが、中には高校の理科で教えられたという回答も複数存在した。また、アンケート時に『水からの伝言』の内容を正しいと思うかどうか尋ねたところ、疑似科学教育を受けたことのない群に比べ、受けたことのある群は「正しい」と回答する割合が有意(1%水準)に高かった。サンプルサイズが小さいため確定的な結論とは言い難いが、学校教育の影響の強さを示唆するものと考えられ、より詳細な調査・対策を考えなければいけないと考えられる。